２５５１１

令和6年度　自己評価及び学校関係者評価

令和7年2月27日
札幌市立平岡南小学校

1　本校の教育目標

どの子も幸せな学校　『笑顔いっぱい　挨拶いっぱい　夢いっぱい』

2　本年度の重点目標

自分がやった！みんながやった！　自分でできた！みんなでできた！

3　自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
『学ぶ力の育成』～深く考え　進んで学ぶ子	「課題探究的な学習」を取り入れた授業づくりと、「わかる・できる・楽しい」授業づくり	B	子どもたちの「考えたい」「やってみたい」という意欲を大切にして、自ら疑問や課題をもち、主体的に解決する学習を目指すとともに、他者と共に学びを深める場・協働的な学びの場が実現するように授業改善を進める。どの子も「わかる・できる・楽しい」を実感できるように、教師が教材化や教師の関わり方について研修を通じて研鑽する機会を設定するとともに、家庭と連携して学習の習慣を身に付けていくことで、基礎学力の定着を図る。 また、外部講師、専門家との連携を強化し、子どもたちの本物の実感を生み出すことで意欲を高めていくこと、教科担任制を積極的に導入し、個々の専門性を生かした指導と子どもの実態把握につなげていくことを重要視していく。	A	A
	ICT・１人１台端末（タブレットPC）の活用	B	ICT の特性・強みを生かした一人一台端末の活用で協働的な学びと個別最適な学びの充実を図る。多様な学びに有効活用できる学習ツールとして、子どもが学習の目標に合わせて一人一台端末を活用できるように、教員間で活用の可能性について共有していく機会を設定していく。 また、情報教育のより一層の充実を図るため、ネットモラル（情報モラル）教育を全学級で確実に実施するよう強化し、その内容を家庭と共有することでインターネットトラブルの未然防止や一人一台端末の家庭での有効活用につなげていく。	A	A
	学校関係者評価委員による意見		低学年から主体的に学ぶ姿勢を大切に、たくさんの成功体験を積み重ね、自信を深めていけるようにしてほしい。基礎学力の定着については、家庭の様子や児童会館での様子からも不足していることが感じられる。学校から家庭に対して具体的な取組等について発信することも必要だと感じる。		
『豊かな心の育成』～明るく　思いやりのある子～	一人一人の子どもが「自分が大切にされている」と実感できる指導と支援	A	一人一人の子どもに対してきめ細やかな見取りを土台とし「ほめる　認める　信じる」姿勢を大切に、子ども一人一人が「大切にされている」と感じる指導場面を充実させることで、他者意識（他者へのいたわり）や「やってみよう」という意欲を高め持続させていく。 いじめを絶対に許さないという教職員の毅然とした強い姿勢と温かい雰囲気と笑顔のある学級が、一人一人が挑戦できる場、自分の成長を実感できる場、自分の存在価値を認められる場となるようにして、自他を尊重する意識を醸成する。また、いじめに対して組織で対応していくために情報共有を重視し、「未然防止・早期発見・早期対応」を徹底していく。	A	A
	特別活動の充実～行事、児童活動、異学年交流～	B	学校行事や児童会活動等における子どもの主体的な活動を推進して、発達の段階に応じて子ども自らが役割と意識をもって学校生活をよりよくできるようにする。そよ風活動での異学年交流や運動会や学習発表会での交流を通して、互いに認め合ったり、仲間と支え合ったりすることで、憧れられる上級生と、それを目指す下級生の関係を築いたり、共に創り上げていく楽しさを感じたりするなど他者との関わりを通してこの成長を促していく。 また、「明るく元気な挨拶」の取組を学級学年、児童活動で継続、推進し、自発的な挨拶を身に付けることで他者意識を育んでいく。	A	A

	学校関係者評価委員による意見	いじめに関しては、日々の手厚い対応を、今後も継続していってもらいたい。子ども同士、子どもと教師、教員同士が信頼関係を築き、お互いに寄り添うことが自己肯定感の高まりにつながり、安心感につながっていくものであるので、今後もあらゆる教育活動の場で大切にしていく必要がある。			
分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
『健やかな体の育成』 ～強い心と体でやりぬく子～	自分で考え最後までやり抜く強い心の育成	B	「やってみたい」と子どもが思える手立てを講じ、自分で・自分たちで「挑戦しよう」「考えよう」と動き出せる運動の場を設定する。子どもの背中をそっと後押しする教職員の関わりや、子ども同士がお互いに励まし合い、協力し合い、頑張りを認め合う支持的な集団の中で、挑戦と失敗・成功を繰り返すことで、粘り強い心と笑顔を育む。	A	A
	進んで運動に親しむ場と指導の充実	A	三間（時間・空間・仲間）を大事にして外遊びを推奨し、日常的に運動機会を創出する。なわデー、縄跳び表現、跳び箱・マット月間での取組等、継続した取組で楽しみながら体力向上を目指すことができるようにするとともに、６年間での育ちとして継続していくことで、成長が自信となってさらに運動の取組が推進していくようにしていく。 また、基本的な生活習慣づくりを、栄養教諭、養護教諭の専門性を生かしながら、学校と家庭との連携を強化し推進する。	A	A
	学校関係者評価委員による意見	平岡南公園等の環境を活用しながら、外遊びが定着している。学校生活だけではなく、放課後も縄跳びをしている姿が見られている。子どもたちの日常生活の中で、映像を見る時間が増えている傾向があるので、家庭と連携し体を動かす機会を積極的に設け「よく働き、よく食べ、よく眠る」生活習慣を身に付けていくことが必要である。			
『信頼される学校』 ～今日的な課題への取組～	「小中一貫した教育」に向けた取組	B	平岡中学校、清田小学校をパートナー校として、教育課程、各育成プログラムや取組を共有する。教職員間の研修の充実を図り、札幌市教育研究推進事業や合同研修で校種間のよりよい連携・継続を目指し教職員間の意識を高める。また、令和９年度よりスタート予定のCS 事業に向けて、計画と準備を進めていく。 また、児童生徒間の交流を行い、９ 年間の学びの連続を子どもが感じられるようにする。	A	A
	一人一人の教育的ニーズに応じた特別支援教育	A	一人一人の発達や実態に即した児童理解により、子どもの実態に応じた指導内容や指導方法を工夫する。 学年、校内関係組織による計画的な支援ができるように細やかな情報共有と関係組織との連携を図る。 全職員がインクルーシブの視点に立った学びへの理解を深め、一人一人の子どもにとって最適な学びを提供できる教育のプロとしての自覚を高めていく。どの子にとっても最適な学びを提供する学びのユニバーサルデザイン（環境・教材、教具・指導方法）についても理解を深めていく。	A	A
	組織的体制と危機管理力の強化、情報の共有と発信	A	メール配信システム「すぐーる」や学校ホームページを効果的に活用し、家庭や地域へ子どもたちの育ちや様子さらに幅広く伝えていくことで信頼・協力関係を構築し、地域に生きる人々にとって子どもたちが「宝物」であり、輝き続ける場として学校が存在していくようにする。 今後も、幼稚園や保育園、中学校との連携と情報共有を図り、地域で子どもを育てる体制づくりを進めていく。	A	A
	学校関係者評価委員による意見	個の発達に適した学びを提供することは、児童、保護者にとっても大きな支えになっていくことである。インクルーシブの視点で教職員の専門性を高め、指導に当たっていくことに大きな期待をしている。			